砂に消えた文字

アン・スウェイト作

猪熊葉子訳

DAINIPPON
JUNIOR BOOKS

大日本ジュニア・ブックス〈フィクション〉

砂に消えた文字

著　者　アン・スウェイト
Ann Thwaite

訳　者　猪熊葉子（いのくまようこ）

発行者　佐久間裕三

発行所　大日本図書株式会社
104 東京都中央区銀座 1—9—10
電話（03）561—8671～9
振替　東京 219 番

印刷所　株式会社 金羊社

製本所　株式会社 宮田製本所

8397—217657—4398

定価 800 円

1972年 8 月 31 日　初版発行

◎猪熊葉子（いのくまようこ）

1928年千葉市に生まれる。聖心女子大学同大学院で児童文学を専攻。さらにオックスフォード大学で『ホビット』の著者トーキン教授の指導をうけ，イギリス児童文学を研究。現在聖心女子大学助教授。『英米児童文学史』（共著，研究社）『太陽の戦士』（サトクリフ作，岩波書店）等，著訳書多数。

◎太田大八（おおただいはち）

1918年大阪府生まれ，多摩美校卒業。児童図書出版を中心に，イラストレイターとして幅広い活動を展開している。1955年日本童画会賞，1958年小学館絵画賞をそれぞれ受賞。現在，日本イラストレイター会議会員。

もし乱丁落丁の本がお手もとに届きましたら，お手数でもご返送ください。取り替えさせていただきます。

砂に消えた文字

アン・スウェイト作　猪熊葉子訳

DAINIPPON
JUNIOR BOOKS
fiction

世界文庫 www.sekaibunko.com

砂(すな)に消(き)えた文字

アン・スウェイト作
猪熊葉子訳
太田大八画

もくじ／砂に消えた文字

1 屋上の出会い・7

2 リスターさんの一家・22

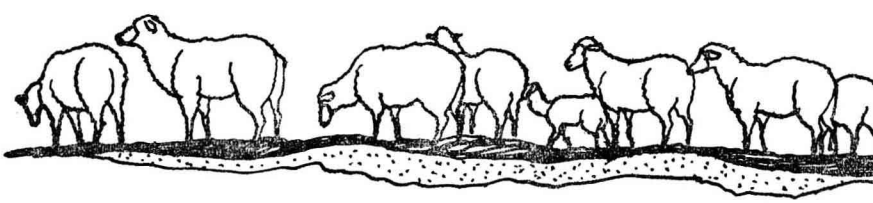
3 約束・42

4 自転車・68

5 爆発・90

6 墓にふきよせる砂・113

7 国のために死す・136
8 水ぎわ・153
9 竜の庭・172
10 地獄への道・196
11 割れた鏡・229
12 命のキス・251
13 十三歳の誕生日・271
あとがき・302



THE CAMELTHORN PAPERS
by Ann Thwaite © 1969
Japanese translation rights arranged through
Charles E. Tuttle Company Inc.
装幀・太田大八

1　屋上の出会い

リビアの強烈な日光がふりそそいでいる屋上に出てきたケイト・ディンズディルは、まぶしさに目つぶしをくわされたかっこうだったが、その目が最初に見つけたのは、てすりの上をわたっている少年のすがただった。うっかり足をふみはずそうものなら、四階の高さから街路までまっさかさまだということをケイトは知っていた。

ケイトは大声でどなりたかった。

「おりなさいったら！　おっこちるじゃないの。お願い、おりてよ！」

だがケイトは、声を殺してそうつぶやいた。きゅうに大声をあげて、かえっておどかすことになってはいけないと思ったからだ。ずっと下の街路から、通り過ぎていく馬車のたてるすずの音がはいあがってくるのがきこえた。

少年はケイトに気づいていなかった。まわりの音という音がたえたなかで、石像にでもなってしまったかのように、緊張にからだをこわばらせているケイトが見守るなかを、少年はかろやか

にはばのせまいてすりの上を伝わっていき、ほこりっぽい屋上の床の上にひょいととびおりた。少年はやせていて色が浅黒かった。ケイトはきっとこの土地の子だろうと思った。はだしの少年はネービィ・ブルーのややくたびれた短ズボンをはいているだけだった。首にはかぎのついたひもをかけていた。

少年はケイトを見つけると、にやりとわらった。少年は大胆な行動をしてのけたことで、興奮しているように見えた。褐色のほほは上気し、その目は輝いていた。ケイトは少年に近づいた。ケイトは怒っていた。そして、たとえ少年が自分をおせっかいだと考えたところでかまうものかと思っていた。

「あんた、ばかね。」ケイトは英語でいった。ベンガジへきてからまだたった二週間しかならなかったから、ケイトはほとんどアラビア語を知らなかったのだ。暑さと、この少年の危険な行動をみてショックを受けたのとで、めまいをおぼえたケイトはひたいに手をかざした。

「うっかりしたら、あんた、死んだかもしれないわよ。」

おどろいたことに、少年は、ちょっとくせはあるがあざやかな英語で返事した。

「びっくりさせたんだったら、ごめんね。だいじょうぶなんだよ。ぼく足もとはたしかなんだ。」

「死んじゃったかもしれないのよ。」

ケイトはふたたびいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「うーん。」少年は黒い髪をなでた。「なにもすることないんだもん。今ならこうやって話し相手ができたけどさ。ハムドウララーだ。」
「それ、どういう意味？」
「ハムドウララーかい？　神さま、ありがとう、とでもいうかな。ぼくたちしじゅうつかうんだよ。」
少年は梱包用の箱をさした。ふたりはならんで箱の上にすわった。むき出しのふくらはぎに、木箱のざらざらした面があたった。暑さがふたりをつつみこんだ。
「ぼくんちの冷蔵庫がこの箱にはいってきたのさ。ママは箱を捨てようっていったんだけど、ぼくはもしかしたら役にたつかもしれないと思ってとっておいた。」
ケイトにはききだしたいことが山ほどあった。だが、まず少年に話させたほうがよさそうだった。少年は話し好きのようだった。
「ぼくたち、きみたちがくる一週間まえにきたんだよ。きみは二階だろ？　きみと妹を見かけたよ。ぼくんちはちょうどきみんちのすぐ上なんだ。カイロからきたんだよ。カイロはすてきなところさ。ベンガジじゃなんにもすることなんかありゃしない。」
少年は箱からとびおりると、屋上にはってあるすべすべしたタイルの上で、しっくいのかたまりをけとばしはじめた。すべてをおおいつくしているこまかなほこりの上にしっくいのあとがつ

いた。少年のはだしの足は、靴のようにかたいようだった。
「あんた、とても英語がうまいじゃないの。」
ケイトは少年のうしろすがたに向かっていった。
少年はふりかえってほほえんだ。
「あたりまえさ。おかあさんがイギリス人なんだもの。ぼくはエジプト人だけどね。ぼくはアラブ共和国の生まれさ。」
「エジプト人?」
それはケイトにとっては奇妙に思われることだった。エジプトといえば、ケイトは大英博物館のエジプトのへやのミイラのことを思いだした。いつかおじさんにつれていってもらったことがある。ケイトは、クレオパトラや、ピラミッド、ツタンカーメンのことを考えた。
「エジプト人ですって?」
ケイトはまたいった。
少年はほほえんだ。
「エジプト人はたくさんいるよ。ぼくの名まえはガマール・ディビッドソン・シュクリ。ディビッドソンてのは母方の名まえさ。チチスターの生まれなんだ。チチスター、知ってる?」
ケイトは知っていた。春に訪れたことがあった。ケイトはてすりのところにいくと、日に照り

つけられている北アフリカの町の通りを見おろした。そして、大聖堂のそばで四本の大通りがまじわっているサセックス州のその町のことを考えた。だが、ケイトはすでにイギリスのことを想像することができなくなっていた。自分たちのいないイギリスでは、今なにが起こっているだろうかということなどは、ちっともケイトの頭に浮かんでこなかった。

「ガマールね。」

ケイトは少年の名を声に出していってみた。「わたしはケイト・ディンズディルよ。妹はジェシカっていうの。もうすぐここへあがってくると思うけど。」

「もしよけりゃ、もっと高いところへのぼれるよ。」

ガマールはすわっていた木箱をたてに置くと、それをはしごがわりにして、階段の上のひさしにのぼった。壁のしっくいをこすったせいで、ガマールの足だの、短ズボンの前はまっしろだった。ガマールが二メートルかそこら高いところにのぼってしまったので、ケイトは手をのばしてひっぱりあげてもらわなくてはならなかった。ふたりの下の屋上の床には、色つきタイルが一面にしきつめられており、はしは、さっきガマールがその上を伝わっていたせまいらんかんで終わっていた。ふたりのすぐ下には階段があり、それはこの建物のなかにあるフラット〈注1〉の各戸に通じていた。屋上の階段のまわりには、小さなへやがずらりとならんでいた。これはもともとせんたくべやで、それぞれにせんたく槽と水栓とがついていたのだが、もう使われなくなってから久しか

った。鍵のかかっているへやもいくつかあり、それはあきらかに物置がわりに使われていた。しかし、ドアのとれてしまっているのもいくつかあった。屋上の一方のはしには、物干綱がはられていて、居住者の奥さんたちがせんたく物をほしていた。この八月の太陽のもとでは、せんたく物をすっかりほし終わったときにはもう乾いてしまうのだった。

「ここにのぼってるとさ、だれにも見えないんだよ。」

ガマールはいった。

「どうして?」ケイトはいった。「わたしたちまる見えじゃないの。」

「この屋上くらいの高さにいるとね。人って下を見おろすものなんだよ。見あげたりしないのさ。自然のことだろう。静かにして。だれかくる足音がきこえるよ。」

ふたりは戸口の上にうずくまり、ジェシカが太陽の光のなかにすがたをあらわすのを見つめた。

「ケイト! どこなの?」

ジェシカはそう叫ぶと屋上をぐるりと見まわした。ジェシカは、少年と姉とが上で待っている階段のまわりをぐるりとまわったが、上を見あげようとはしなかった。ガマールは正しかった。

「おかしいなあ。」

ジェシカは口に出してそういいながら、からっぽのせんたくべやのひとつをのぞきこんだ。

「ケイト、いないの？」

ジェシカはらんかんのところへ歩いていき、建物のたっている町の一角を見おろした。このフラットのある一角はヤシがはえており、噴水がしつらえてある気持ちのいい一角だった。港からきこえてくる汽笛の音に耳をかたむけながら、ジェシカはしばらく下を見つめていた。ジェシカは港の青い水や防波堤の先にひろがる地中海の青い色を見るのが好きだった。港の外の海の青さは、港内の青さとはすこしちがっていて、おだやかな八月の昼の海にくだける波の白い波頭が見えた。

「のぼってらっしゃいよ。」

ケイトは静かにいった。

ジェシカはくるりとふりむき、ふたりを見つけた。

「どうやってそこにのぼったの？」

そういってから、ジェシカは、ふたりが踏み台がわりにした木箱を見つけた。ガマールが手をのばしてジェシカをひっぱりあげたが、ジェシカもやっぱり壁で足をすりむき、木綿のスカートをよごしてしまった。痛さにジェシカは涙を浮かべたが、ガマールにすっかり興味を感じていたので、泣き出すにはいたらなかった。ジェシカはケイトよりも三つ下の九歳だった。ジェシカは、よごれたり、傷ついたりするのがきらいだった。だが涙のはたす役割をちゃんと心得てお

り、しばしばそれを用いるジェシカでさえも、今は泣くべきときでないことがわかっていた。
「あたし、ジェシカよ。」ジェシカは少年にほほえみかけると、髪をなでた。「あなた、わたしたちの家の上に住んでるでしょ。あなたが緑色のシャツ着てるの見たわ。あなたのおかあさんって、すてきな髪してるわね。」
「そうかなあ。」
ガマールは驚いたらしかった。母親の髪は黒っぽくて、ガマールの髪と同じようにちぢれていた。ケイトもジェシカも、くせのない金髪で、おかっぱだった。ジェシカは髪を腰のあたりまでのばしたいと願っていたので、髪を切る話になると、いつでも大さわぎをするのだった。
「だってあたしたちふたりとも、同じような髪をしてるでしょ。だからみんなが、あなたたちってなんてよく似てるんでしょうっていうんですもの。」ジェシカはばかげた声を出しておとなのまねをしてみせた。「だけどほんとうはわたしたちとてもちがうのよ。だってわたしはケイトほど学校が好きじゃないしね。ここじゃあたしが学校へ行って、ケイトが行かないんだもの。運がわるいわ、わたしたち。」
ガマールはまた驚いたようだった。ケイトはいった。
「わたし、ここのイギリス人学校に行くには大きすぎるのよ。イレブン・プラス〈注2〉までの子たちしかとらないでしょう。だから、来年になると、わたしは、イギリスからの通信教育で勉強するの。

家で勉強するわけよ。」

ケイトは不満そうな声を出した。だがほんとうをいうと、大理石の床の静かなへやにひとりでこもって勉強するというのは悪くないと思っていた。まっしろな紙ととがったえんぴつを机の上に置いて勉強するのだ。時計が十時半をさすと、母親が氷で冷たくしたレモネードを持ってきてくれる。寝室を自分だけの場所だと想像することは、ぜんぜんできないわけではなかった。だがもちろん、寝室から家族のみんなをすっかりしめ出すことはできない。母親も、父親も、ジェシカも、いつでも好きなときに寝室へやってこられる。ケイトは自分だけの、だれも立ち入らないへやがほしかった。

イギリスにいるときには、ケイトは細長い庭のはずれにある古いニワトリ小屋に自分だけの場所を持っていた。そこは土やさびのにおいがした。このようなフラット住いをしている場合には、それがもっと必要なのだ。

「ぼくはこまらないんだ。」ガマールがいっていた。「ぼくはどんな学校にだって行けるからね。もちろんアラビア語がはなせるもの。おとうさんはしょっちゅう、ぼくたちはアラブなんだっていっていた。リビアでも、エジプトでも、ここらあたりの国ぐにじゃみんな同じことばを話すからね。だけどここの学校はひどいだろうな。ここへこなけりゃよかったんだ。ぼくはカイロにいたほうがよかったな。ベンガジなんかよりもずっとずっと大きいんだもの。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com